

団体名：フードバンク宇都宮

代表者名：理事長 二見令子 フードバンク担当：徳山 篤

事業規模簿：4800万円（内FB事業：360万円） ボランティアスタッフ数…30人（定期）

施設配布先：各種福祉施設、青少年自立ホーム、困窮者個人宅等

活動地域：栃木県内（宇都宮市、日光市、大田原市、佐野市、鹿沼市）

事業概要

フードバンク宇都宮は、とちぎボランティアネットワークを母体とした活動をしており、以下、フードバンク事業以外は、7つ事業の一事業を行なっている。

【フードバンク宇都宮】

(1) フードバンク事業：福祉施設への配送

(2) 生活困窮者支援：ホームレス支援、夜回り活動、個人支援

※県内のよりそいホットラインとの連携もある。

- ① ボランティアセンター：ボランティア情報の収集と発信、ボランティア希望者へのコーディネート業務、ボランティアに関する教育・研修の場、ボランティアの情報交換を促進する事業
- ② NPO活動推進センター：NPOなどの団体における、運営・マネジメント・運動をサポートする中間支援業務
- ③ 若者への自立支援事業：とちぎ若者サポートステーション事業は、さまざまな理由で働くことが困難な若者たちのための自立就労支援機関である。官民を超えた県内の若者支援団体とのネットワークを活用しながら問題を解決し、若者の自立をサポートしている。
- ④ 調査研究・連絡調整・ネットワーク
 - (1) 震災がつなぐ全国ネットワークへの加盟・運営
 - (2) 「全国民間ボランティア・市民活動推進者企画戦略会議」の運営
- ⑤ 災害ボランティア・オールとちぎ：地震や水害など、災害時での救援・復興支援活動をしているボランティア組織
- ⑥ とちぎコミュニティ基金：栃木県内唯一の「市民ファンド」として、「資金循環・情報循環を活性化する」事を目的とし、寄附を考えている個人や企業への啓発、寄附を受けたいNPOを向けに、学習会や助成プログラムの紹介をしている。
県内NPOの活動を活発化させ、「市民の手による新しい市民社会を作る」基金を目指している。
- ⑦ 広報活動
 - (1) 出版・編集事業 (2) 書籍販売事業 (3) 物品販売事業

ポイント

【福祉の総合相談窓口の一つの機能としてのフードバンク】

フードバンク活動をする以前から、若者自立支援や生活困窮者支援を行なっており、個別具体的なSOSの声を拾い、地域ボランティアの方々と協力を得ながら対応をしている。

行政機能（生活保護受給・障がい者認定）の活用を含めて、当人と一緒になり、一つ一つ解決している。その中で、必要な場合にフードバンク食品を提供することにより、手厚いサポートが可能となっている。

【行政との連携】

宇都宮市役所においては、行政としては支援がしにくい、ホームレスの方などの対象者が来訪した場合、とちぎボランティアネットワークを紹介する流れができている。行政側としては、その対象者に対して、適切な対応が行えるという認識のため、定期的に数名紹介としている。

対象者が生活保護に関して、受給の必要性があると判断した場合、手続き上で必要な同行支援もしている。事前に必要な情報の整理及び、住居紹介も合わせて準備しているため、生活保護が受給につながりやすい。

また、ホームレス状態の方の生活保護支給の前倒しを福祉事務所に依頼したり、小口貸付金の申請を同行支援で手伝える。その後も、連絡を取りながら継続的な支援を実施。

宇都宮市役所は、申請内容に問題がなければ、翌日には、生活保護が支給されるという迅速な対応をしている。

【地域の社会福祉協議会との連携】

ボランティアセンター機能を持っていることから、市町村の社会福祉協議会とのネットワークがあり、大口の入庫の際は、施設への個別配送も行うが、社会福祉協議会へ食品を配送することができる。よって社会福祉協議会を拠点とした形で、多くの施設へ効率的に配布することが可能である。

【中間支援組織としてのメリット】

NPOの活動推進・支援事業も行なっているため、さまざまな団体とつながっている。団体自体の運営・活動状況が見えているので、食品のニーズを得て、配布する先の優先順位を客観的に判断することが出来る。

【仙台市のフードバンク団体・困窮者支援団体との連携】

昨年の秋ごろから、東北支援事業一円のモデルづくりとして、ふーどばんく東北 AGAIN とワンファミリー仙台の2団体から、生活困窮者支援におけるフードバンクシステムの活用方法を定期的にアドバイスを受けている

なお、ふーどばんく東北 AGAIN は、福島市や郡山市への食品の連携が始まっており、更に郡山市と宇都宮市を繋ぐために準備をしている。

取り組みの経緯

フードバンク活動を始めたきっかけとしては、リーマンショックが発生後、困窮者の相談が多くなった。特に若者支援を行ってから、将来仕事に就けず社会に入ることができない若者が多くなったため、地域ニーズが大きいと判断し設立に至った。

以下、フードバンク活動経緯

2009年：フードバンクを行うことを決定。

2010年10月：2HJのフードバンク研修を半年かけて実施。

2011年4月：専属職員を配置し試験的な運用を開始。

2011年10月：本格的な稼働を開始する。

2011年11月：第1回フードドライブを実施。

2012年5月：第2回フードドライブ実施

2012年8月：第3回フードドライブ実施

同月：真岡市拠点場所設置

2012年10月：大田原支部設置検討開始

2012年12月：第4回フードドライブ実施

2013年1月：又は2月大田原支部設置予定

活動方針

食の確保は人間の最後のセーフティーネットであると考えている。行政や団体・施設などに属することができない、行き場のない個人を重点的且つ優先的に支援していく。

活動事例

①直接、ある夫婦がフードバンク宇都宮に食品救援を求めてきた。食品を届けに行き、現状を聞き取りしたところ、生活そのものが生命の危機状態であった（所持金 300 円）為、お金を立て替えた。

以前は、派遣の仕事していたが、仕事がなくなり、他に仕事を探しても就労につながらない状況が続いていた。行政で、住民票など書類申請にあたって、必要な事務経費 850 円の支払いができなかったという経緯があり、困窮状態であった。

②日光市にある「だいじょうぶ（NPO 法人）」という団体は、貧困や育児放棄など、公的な助けを受けられず、行き詰まった母子を保護し、家庭の温かさを感じることでできる居場所づくりやショートステイ事業、養育困難家庭の訪問事業を行なっている。この団体には、優先的に食糧の提供をしている。

③働き盛りの若い世代（20 代～40 代）が、ハローワーク（宇都宮）や若者支援団体からの紹介により、訪ねてくる人が増えてきた。また、若者支援団体・サポートステーションとの繋がりがあり、食糧供給をセットした対応ができるので、紹介を受けやすい。

リーマンショック以降は、日本の製造業自体の雇用も減っており、正規雇用を雇わずに、派遣労働者が増えている。その為、実家住まいの家があるが、将来的に自立はとてむずかしい若い世代が増えている。

④ 4 半期ごと程度に、フードドライブを行い、個人への困窮者支援に活用することができている。また、路上生活者や困窮者を対象に公共施設を借りて毎月 1 回程度の食事会を行なっている。自分の居場所、拠り所ができ、社会との繋がりを持つことができる。

提携食品企業

【定期】

とちぎコープ生活協同組合：加工品、調味料など

株式会社ベジファーム：農産物

スナックフード・サービス(株)：毎月、2,3 回でダンボール 5,6 箱

【不定期】

お寺お供え物：お米、お菓子、調味料など

支援の視点

生活困窮者の支援を第一に優先（特に母子家庭）し、若者自立支援をしている団体や被虐待児童の食事支援している施設、ホームレス等の社会復帰・自立支援をしている団体を中心に寄贈品を配布する。

ネットワークの視点

栃木県、県北域をカバーするため、大田原支部を設置準備中である。保管場所としては、農協の保管倉庫を間借りする予定。

大田原市は、元々、行政と社協、市民活動の場として地域の問題に対して解決意識を持って一体化している地域なので、非常に進めやすい。大田原市には、5名のボランティアメンバー（ボランティア？）がいる。

そのメンバーは、定年後、以前から地域でボランティア活動をしていおり、次世代交流喫茶（若者と高齢者をつなぐ事が目的）という場を運営しているメンバーである。フードドライブの拠点受付場所にもなりうる。

とちぎボランティアネットワークでは、定期的に会員向けやメンバー会議があるので、その中で、地元でフードバンク活動に協力する方もいる。

各地域のメンバーが、各行政から依頼をされた、個人世帯への支援もしている。食糧の集荷は、会議のついでにしているの、負担のない食糧支援ができる。

真岡市においても、常設ではないが食品の集荷場所を設置した。県内全域にフードバンクネットワークを構築する目標で活動を広める。

全国の各地域に拠点ができ、拠点ごとに受け入れと供給の流れが確立し、全国的に緩やかなネットワークを張り巡らし、民間企業との物流網と協力していけば、もう一つの流通が確立していくと考える。

その後、食品廃棄量の削減、災害時の食品支援が有効に機能することが望ましいと思っている。

成果と課題

【成果】

徐々に、施設・団体から、一部の地域などからフードバンク活動の認知度が上がってきており、公的機関にも認知されつつある。

とちぎコープさんより、無償で倉庫を間借りできており、受け入れ体制が拡充している。

【課題】

・運営資金は自前では調達できていない。寄付による資金調達の方法を確立する必要がある。生活困窮者支援の助成金が45万円あるが、フードバンク事業本体には使用できないため、とちぎコープさんと協力しながら、パンの購入費用に充てる予定。

・認知度は上がっているが、まだまだ一般向けの認知度が不足している。

・個人情報の壁があり、本来支援すべき人が見えてこない。（特に母子家庭）

・フードバンク食品の特徴である単品多量の商品が多いため、個人を支援する場合バランスの良い食材を配達することができない。その為、大きい労働組合組織やYMCAなど団体単位でのフードドライブ考えている。